

東南アジア史学会会報

No. 44 昭和61年5月

御挨拶

会長 石井米雄

東南アジア史学会が創設されて20年という記念すべき時を迎えるにあたって、はからずも会長の重責を担うことになった今、わたくしはその責任の重みをしみじみと感じております。

この20年の間に、東南アジア研究をめぐる世界の情況には、まことに大きな変化が起こりました。そのひとつに、かつて欧米人研究者によってほとんど独占されていたかに見えた東南アジア研究の第一線に、東南アジア出身の若い学者たちが参入し、目覚ましい活動を開始したことがあげられます。かれらの中のある者は、欧米で学んだ方法論を無批判に自国の文化・社会の分析に適用した初期の段階をすでに乗り越え、自国の言語を自由に駆使できるという利点を生かし、一次史料の厳密な検討の上に新たな理論を構築すべく、さまざまな野心的試みを行っております。

わが国では、先覚者たちのたゆみない努力によって、漢籍やヨーロッパ語の史料の綿密な文献学的研究に基づく、東南アジア研究のすぐれた伝統が築かれてきました。近年においては、若い研究者たちによって、東南アジア諸語史料を用いた新鮮な研究が次々と発表されております。こうした学会の伝統を背景にしながら、今後、わたくしたちは、さらに発展を続ける世界の東南アジア研究の流れにいかに参加し、東南アジアの歴史と文化の学問的認識の深化にいかなる貢献をすることができるのか、東南アジア史学会創立20周年を迎えるにあたって、会員の皆様とともに静かに考えてみたいと存じます。

なお新委員を次のように委嘱しましたので併せて御報告申し上げます。

第11期委員（敬称略、任期は昭和62年末まで）

（庶務）桃木至朗、（会計）渡辺佳成、（会計監査）川本邦衛、（編集）石澤良昭・吉川利治・早瀬晋三・奈良修一、（編集顧問）山本達郎・白鳥芳郎、（涉外）陳荆和・生田滋、（大会）市川健二郎・畠博満・土屋健治・加藤剛、（東北・北海道地区）坪井善明、（関東地区）永積昭・池端雪浦、（中部地区）明石陽至、（関西地区）深見純生・八尾隆生、（中国地区）今永清二、（九州地区）新田栄治

また事務局は下記に置きます。

〒606 京都市左京区吉田下阿達町 46 京都大学東南アジア研究センター内 桃木至朗研究室

TEL 075-751-2111 内線 7348

第11期会長候補者選考委員の選挙

昭和60年8月31日現在の会費完納者で、国内在住の会員有権者 139名を選挙人名簿に登録した。10月1日に学会事務局において、青柳洋治、奥平龍二、田中則雄、長岡新治郎、根本敬の5委員が選挙管理委員会を開催し、選挙人全員へ選挙関係書類を発送した。締切日の10月25日までに86

票の投票封筒を受信した。

10月29日に学会事務局で第2回選挙管理委員会を開催し、上記委員が開票した結果、下記の7名が選考委員に当選した。池端雪浦、石井米雄、石澤良昭、市川健二郎、陳荆和、土屋健治、永積昭（50音順）。

第11期会長候補者選考委員会

昭和60年12月7日12~13時、創価大学において委員会を開催した。審議の結果、会員の石井米雄氏を次期会長候補者として会員総会へ推薦することに決定した。

第10期第5回委員会

昭和60年12月8日に創価大学で委員会を開催した。出席者17名。秋期総会の報告事項と協議事項の原案を審議決定した。

昭和60年度秋期総会摘要録

上記総会を昭和60年12月8日創価大学で開催し、川本邦衛委員が議長となり、次の議事をはかった。

〈報告事項〉

1. 庶務委員より新入会員5名の紹介、学会会報43号の発行、長谷川清、根本敬両庶務委員の海外留学にともなう研究大会受付事務補助員の件の説明があった。また、会員名簿を全会員276名へ配布した残部を定価1000円で実費販売したい旨の提案があり、これを了承した。
2. 会計委員より11月末現在の昭和60年度会計中間報告があった。
3. 編集委員より『東南アジア—歴史と文化』第15号の編集状況について説明があった。
4. 関東地区と関西地区の研究例会委員よりそれぞれ月例会開催の報告があった。
5. 渉外委員から来年ドイツで開催する国際東方學會議とシンガポールで開催する国際アジア歴史学者會議について、また会長から中国東南亞研究会（会長：戴可来、鄭州大学、副会長：韓振華、廈門大学）との学術交流について説明があった。
6. 会長候補者選考委員選挙管理委員より去る10月に実施した選挙の結果について報告があった。

〈協議事項〉

会長候補者選考委員より選考経過と結果について報告があり、次期会長候補者として会員の石井米雄氏を推薦する旨の提議があり、原案どおりこれを決定した。つづいて新会長より就任の挨拶があった。

地区研究例会

〔関東例会〕

昭和60年10月6日 「日本占領時代に対するシンガポールの関心と動き——『新馬華人抗日史料』の紹介を通して」蔡史君 会場：上智大学10号館

11月12日 「雲南・ベトナム出土早期銅鼓の意味解釈」宇野公一郎

会場：上智大学7号館

昭和61年3月29日 「「インドネシアの紅はこべ」とタン・マラカ伝説」押川典昭

会場：上智大学10号館

(関西例会)	会場: 京都大学東南アジア研究センター
昭和60年10月26日	「ヴェトナム李朝の地方支配と権力基盤」桃木至朗
11月30日	「南詔の統治体系 — 「臉」について」林謙一郎
12月21日	「ベトナム黎朝初期の王権をめぐって」白石昌也
昭和61年1月25日	「ヴェトナム黎朝初期の政権のあり方をめぐって — 官僚制国家の形成に至る過程の一考察」八尾隆生
2月22日	「1985年紅河デルタ農業事情」桜井由躬雄
3月29日	「私のアジア — シンガポール・香港」可児弘明

東南アジア史学会第34回研究大会

昭和60年12月7日(土)・8日(日)の両日、創価大学で開催された。大会プログラムと発表要旨は次の通りである。

12月7日(土)

<開会の辞>	陳荆和(創価大学)
<自由発表>	
A S E A N諸国に於ける地域主義について	高木功(創価大学平和問題研究所)
DEVARAJA論	岩本裕(創価大学)
愛國愛郷華僑の建前と本音	市川健二郎(東京水産大学)
フィリピン労働法とアジア的労使関係	神尾真知子(埼玉大学)

<特別講演>

Singapore and the Viability of Democracy. Dr. Seah Chee Meow(シンガポール国立大学)

12月8日(日)

<共同テーマ> 東南アジアに於ける神話	
天の川をB I M A - S E K T Iと呼ぶジャワ人の神話的論理	中島成久(法政大学)
ジャワ建国説話の一考察	生田滋(東洋文庫)
カンボジア・アンコール遺跡における図像描出と神話的世界	石澤良昭(上智大学)
政治権力の起源の神話的説明 — 東南アジア大陸部諸国及び日本の事例 —	山本達郎
総括報告	大林太良(東京大学)
<会員総会>	
<閉会の辞>	会長・市川健二郎(東京水産大学)

A S E A N諸国に於ける地域主義について

高木 功

A S E A N(東南アジア諸国連合)諸国を含むアジア地域において第二次世界大戦後、ナショナリズムの運動とともに、顕著な動向としてリージョナリズムの台頭があった。それは地域における国際政府機構(I G O s)の生成にあらわれ、1985年までに、その数は48に達し、現在まで

機能しているものだけでも35を数える。ASEAN諸国これら国際政府機構への加盟率は非常に高い。タイは28のIGOsに加盟しており、最も高い80%の加盟率を、そしてマレーシア、フィリピン、インドネシアもそれぞれ、76%、73%、67%と高加盟率を示している。非ASEAN諸国の平均加盟率が10%程度であることを考えるとASEAN諸国はアジア国際機構への積極的な参加が浮かびあがってくる。また各IGOsが目的とする“問題領域”(issue area)の広狭を見た場合、多くのアジア地域機構が1ないしは2、3の問題領域を扱う単一目的組織であるのに対し、ASEANのそれは政治、経済、通信等、IGOs中最も広い分野に及ぶ多目的機構を構成している。そして、ASEANが東南アジアというサブ・リージョンに位置し、自律的な政治・経済秩序の形成に、その国内政治・経済の脆弱性のゆえに極めて高い利害関係を共有し、その実現をめざす諸国から構成されていることは、他のアジアIGOsから一線を画すことになっている。アジアという主に第三世界諸国から構成される地域にあって、ASEAN諸国はASEANという核機構を拠点に多様な機能面の協力関係を構成することによってアジアの協力・統合関係の推進に重要な役割を担っているといえよう。

ASEAN地域主義を観る場合に、その発展に果たす域外からのインパクトを過大に評価し、その自律性と内在的論理を無視しがちである。しかし、ASEAN生成の系譜をたどったときに、その背景には間接的にしろ、“バンドンの精神”を起点とする反植民地主義と脱植民地主義ならびに強烈なナショナリズムとリージョナリズムが看取されるし、他方、直接的には東南アジアというサブ・リージョナルな政治・経済・文化空間の中で、自らの運命を自ら決することができるような地域秩序形成に向けての内発的な努力がなされてきたことがわかる。SEAFET(東南アジア友好経済条約、1959)構想、ASAS(東南アジア諸国連合、1960)構想、そしてASA(東南アジア連合、1961)の結成とMaphilindo(1963)結成という内発的な努力の継続の上にASEANは成立したのである。独立後、国内的には、長き植民地時代に禍根を持つ、民族・宗教対立と政治・経済的脆弱性を含み、域内的には相互の新興ナショナリズムによる軋轢が国境・民族紛争を生起させ、さらに、域外からは東西両体制の対立的二極構造と伝統的な中国の脅威が地域の政治秩序を大きく決定づけている状況の下で、ASEAN各国は国民政治・国民経済・国民社会・国民文化を創りあげるという至難の課題を抱えていたのであった。

ASEANの誕生はASEAN諸国にとって、当初は地域の安定と平和と協力のシンボルとして機能し、後には、域内における、そして域外に対する政治・経済秩序形成システムとして発展してきたのだった。それは即ち、国家として政治・経済的自立の達成をめざすASEAN諸国にとって、不可欠な要件なのである。

DEVARAJA論

岩本 裕

devaraja という語はカンボジア語の kamraten jagat ta raja と同義語と解され、'dieu-roi' と訳され、カンボジアのみならず東南アジアにおける神王思想を代表する語として拡大解釈されてきた嫌いがある。devaraja を 'dieu-roi' と訳することは、この複合名詞を同格限定複合語と解釈するものであり、インドにおける解釈はない。インドでは古くから10世紀ごろまで「神の王」と格限定複合語と解されて、インドラ神のことである。後に南インドの碑文に於いて Siva 神、Visnu 神が devaraja と呼ばれているが、これはやはり「神の王」としての解釈に

機能しているものだけでも35を数える。ASEAN諸国これら国際政府機構への加盟率は非常に高い。タイは28のIGOsに加盟しており、最も高い80%の加盟率を、そしてマレーシア、フィリピン、インドネシアもそれぞれ、76%、73%、67%と高加盟率を示している。非ASEAN諸国の平均加盟率が10%程度であることを考えるとASEAN諸国はアジア国際機構への積極的な参加が浮かびあがってくる。また各IGOsが目的とする“問題領域”(issue area)の広狭を見た場合、多くのアジア地域機構が1ないしは2、3の問題領域を扱う単一目的組織であるのに対し、ASEANのそれは政治、経済、通信等、IGOs中最も広い分野に及ぶ多目的機構を構成している。そして、ASEANが東南アジアというサブ・リージョンに位置し、自律的な政治・経済秩序の形成に、その国内政治・経済の脆弱性のゆえに極めて高い利害関係を共有し、その実現をめざす諸国から構成されていることは、他のアジアIGOsから一線を画すことになっている。アジアという主に第三世界諸国から構成される地域にあって、ASEAN諸国はASEANという核機構を拠点に多様な機能面の協力関係を構成することによってアジアの協力・統合関係の推進に重要な役割を担っているといえよう。

ASEAN地域主義を観る場合に、その発展に果たす域外からのインパクトを過大に評価し、その自律性と内在的論理を無視しがちである。しかし、ASEAN生成の系譜をたどったときに、その背景には間接的にしろ、“バンドンの精神”を起点とする反植民地主義と脱植民地主義ならびに強烈なナショナリズムとリージョナリズムが看取されるし、他方、直接的には東南アジアというサブ・リージョナルな政治・経済・文化空間の中で、自らの運命を自ら決することができるような地域秩序形成に向けての内発的な努力がなされてきたことがわかる。SEAFET(東南アジア友好経済条約、1959)構想、ASAS(東南アジア諸国連合、1960)構想、そしてASA(東南アジア連合、1961)の結成とMaphilindo(1963)結成という内発的な努力の継続の上にASEANは成立したのである。独立後、国内的には、長き植民地時代に禍根を持つ、民族・宗教対立と政治・経済的脆弱性を含み、域内的には相互の新興ナショナリズムによる軋轢が国境・民族紛争を生起させ、さらに、域外からは東西両体制の対立的二極構造と伝統的な中国の脅威が地域の政治秩序を大きく決定づけている状況の下で、ASEAN各国は国民政治・国民経済・国民社会・国民文化を創りあげるという至難の課題を抱えていたのであった。

ASEANの誕生はASEAN諸国にとって、当初は地域の安定と平和と協力のシンボルとして機能し、後には、域内における、そして域外に対する政治・経済秩序形成システムとして発展してきたのだった。それは即ち、国家として政治・経済的自立の達成をめざすASEAN諸国にとって、不可欠な要件なのである。

DEVARAJA論

岩本 裕

devaraja という語はカンボジア語の kamraten jagat ta raja と同義語と解され、'dieu-roi' と訳され、カンボジアのみならず東南アジアにおける神王思想を代表する語として拡大解釈されてきた嫌いがある。devaraja を 'dieu-roi' と訳することは、この複合名詞を同格限定複合語と解釈するものであり、インドにおける解釈にはない。インドでは古くから10世紀ごろまで「神の王」と格限定複合語と解されて、インドラ神のことである。後に南インドの碑文に於いて Siva 神、Visnu 神が devaraja と呼ばれているが、これはやはり「神の王」としての解釈に

基づく。

devaraja という語はカンボジア碑文では Sdok Kak Thom 碑文 (K235) に 3 回見られるだけで、v.61 および v.63 の devarajasya arcām、devarajarcana- の場合は 'dieu-roi' と解することも可能であろうが、v.29 の siddhirvahantih kila devarajabhikhyah (碑面 -khyam) vidadhre 「siddhi (「悉地成就」すなわち密教でいう「即身成仏」) をもたらす、devaraja という〔密儀〕を執行した」とあって、到底 'dieu-roi' とは理解しがたい。しかも、Sdok Kak Thom 碑文において、devaraja の語は僅か 3 回見られるのに対し、kamraten jagat ta raja という語は実際に 23 回見られる。この碑文の第 3 面 56 行を見ると、クメル語で「Paramesvara 隆下 (=Jayavarman II) は都城 Mahendraparvata に kamraten jagat ta raja を安置した (prati-stha)」と記され、'dieu-roi' の解釈は到底考えられない。Kamraten jagat は Skt. jagat-pati 「世間の主」の訳で、インドでは Mahabharata 以来 Siva 神の異称である。ta は現代カンボジア語 tha または kuita 「すなわち」に該当するとして、「王者である Siva 神」と理解され、'dieu-roi' の意に解せられることも可能である。しかし、devaraja に関しては v.29 の記事がその解釈を拒む。すなわち、vv.26-27 に Hiranyakadama という婆羅門が司祭官の Siva-kaivalya に siddhi を教えたと記し、次いで v.28 において 4 種の sastra (論典) を教え、そして v.29 において「論典の精粹を抽出して (samuddhrtya sa sastrasaram)、実際に devaraja という siddhi をもたらす〔密儀〕を執行した」とあるのであるから、4 種の論典の内容が問題である。この 4 論典は Siva-Sakti Mysticism の文献と考えられるが、詳細不明である。

次に注意すべきは Sdok Kak Thom 碑文の v.35 から v.62 を見ると、Sivakaivalya を初代とし 9 代の Sadasiva (この碑文の建立者) に至る purohita の家系が見られるが、代々「妹の子」 (svasriya) とか「妹の娘の息子」 (bhagini-suta-sunu) などと記され、この purohita たちは結婚していないことを示すと考えられる。しかも、v.74 に依れば Sadasiva は Suryavarman I (1010-1049) によって皇后の妹と結婚させられ、Khlon karmantara eka (内大臣または侍従長) にされたと、むしろ痛恨の思いをこめて記している。このことを併せ考えると、初代 Siva-kaivalya から 8 代 Sivacarya までの 8 人の purohita は結婚していないこと、そしてその祭神は Sakti (女性神格) であり、その職務は密儀に関与していたことを推察させる。しかも、Sadasiva はクメル語の部分に結婚したあと家長として kamraten jagat ta raja の purohita であると記される。従って、devaraja と kamraten jagat ta raja とを同一視することは到底できない。

愛国愛郷華僑の建前と本音

市川健二郎

従来の華僑史観には、1. 一世僑胞は余生を祖国で過ごしたいと望むが、2. 三世華人は出生地社会に同化し骨を埋める覚悟をもつとみる説、3. シンガポール国民は伝統中国性を避けて東南アジア性を求めているという説、3. クリオール文化 (二世の中間文化) はメスティーソ、ババ、プラナカン各社会で異なる変様を示したと説く説などがある。これらの現住地文化への変様説に対して、筆者は 1985 年夏に踏査した福建華僑郷土の実態調査資料にもとづき、精神生活面における華僑の伝統中国文明の持続性という新側面を強調したい。

拙著『陳嘉庚』(1984 年) を批判したアモイ大学南洋研究所の諸氏は陳嘉庚を愛国愛郷華僑の

基づく。

devaraja という語はカンボジア碑文では Sdok Kak Thom 碑文 (K235) に 3 回見られるだけで、v.61 および v.63 の devarajasya arcām、devarajarcana- の場合は 'dieu-roi' と解することも可能であろうが、v.29 の siddhirvahantih kila devarajabhikhyah (碑面 -khyam) vidadhre 「siddhi (「悉地成就」すなわち密教でいう「即身成仏」) をもたらす、devaraja という〔密儀〕を執行した」とあって、到底 'dieu-roi' とは理解しがたい。しかも、Sdok Kak Thom 碑文において、devaraja の語は僅か 3 回見られるのに対し、kamraten jagat ta raja という語は実際に 23 回見られる。この碑文の第 3 面 56 行を見ると、クメル語で「Paramesvara 隆下 (=Jayavarman II) は都城 Mahendraparvata に kamraten jagat ta raja を安置した (prati-stha)」と記され、'dieu-roi' の解釈は到底考えられない。Kamraten jagat は Skt. jagat-pati 「世間の主」の訳で、インドでは Mahabharata 以来 Siva 神の異称である。ta は現代カンボジア語 tha または kuita 「すなわち」に該当するとして、「王者である Siva 神」と理解され、'dieu-roi' の意に解せられることも可能である。しかし、devaraja に関しては v.29 の記事がその解釈を拒む。すなわち、vv.26-27 に Hiranyakadama という婆羅門が司祭官の Siva-kaivalya に siddhi を教えたと記し、次いで v.28 において 4 種の sastra (論典) を教え、そして v.29 において「論典の精粹を抽出して (samuddhrtya sa sastrasaram)、実際に devaraja という siddhi をもたらす〔密儀〕を執行した」とあるのであるから、4 種の論典の内容が問題である。この 4 論典は Siva-Sakti Mysticism の文献と考えられるが、詳細不明である。

次に注意すべきは Sdok Kak Thom 碑文の v.35 から v.62 を見ると、Sivakaivalya を初代とし 9 代の Sadasiva (この碑文の建立者) に至る purohita の家系が見られるが、代々「妹の子」 (svasriya) とか「妹の娘の息子」 (bhagini-suta-sunu) などと記され、この purohita たちは結婚していないことを示すと考えられる。しかも、v.74 に依れば Sadasiva は Suryavarman I (1010-1049) によって皇后の妹と結婚させられ、Khlon karmantara eka (内大臣または侍従長) にされたと、むしろ痛恨の思いをこめて記している。このことを併せ考えると、初代 Siva-kaivalya から 8 代 Sivacarya までの 8 人の purohita は結婚していないこと、そしてその祭神は Sakti (女性神格) であり、その職務は密儀に関与していたことを推察させる。しかも、Sadasiva はクメル語の部分に結婚したあと家長として kamraten jagat ta raja の purohita であると記される。従って、devaraja と kamraten jagat ta raja とを同一視することは到底できない。

愛国愛郷華僑の建前と本音

市川健二郎

従来の華僑史観には、1. 一世僑胞は余生を祖国で過ごしたいと望むが、2. 三世華人は出生地社会に同化し骨を埋める覚悟をもつとみる説、3. シンガポール国民は伝統中国性を避けて東南アジア性を求めているという説、3. クリオール文化 (二世の中間文化) はメスティーソ、ババ、プラナカン各社会で異なる変様を示したと説く説などがある。これらの現住地文化への変様説に対して、筆者は 1985 年夏に踏査した福建華僑郷土の実態調査資料にもとづき、精神生活面における華僑の伝統中国文明の持続性という新側面を強調したい。

拙著『陳嘉庚』(1984 年) を批判したアモイ大学南洋研究所の諸氏は陳嘉庚を愛国愛郷華僑の

模範であると評価する。この建前論は中国共産党の歴史上の人物再評価路線にそういうものであり、祖国近代化への華僑投資優待の政策と密接な関係がある。中国近代化に貢献した嚴復、愛国政治家康有為、香港解放の愛国先駆者林則除、台灣解放の愛国華僑鄭成功らの偉業をたたえる路線と軌を一にするものである。港澳同胞、台灣同胞、海外僑胞、外籍華人は陳嘉庚を模範とし愛国愛郷華僑の誠意を示すべきだという建前論に他ならない。

1980年代に入ると、中共党中央と国務院は対外開放政策を推進し、沿岸港市の14の経済技術開発区に導入外資の審査権限を一部委譲した。許認可業務を握る地方官僚の権威が高まる一方で、華僑合弁企業は合作の相手方にふさわしい信頼と忠誠を保証するために、子弟を祖国の華僑学校へ留学させたり、校友会組織等を通じて華僑学校へ設備と備品を寄付する傾向がめだった。アモイ、泉州、福州各地の華僑大学、高中学校における筆者の現状調査資料によれば、文化大革命当時に破壊された校舎の復旧や新式の科学教材の寄付を主として南洋華僑に依存している。帰国華僑連合会の建物、自動車、機器に至るまで同様である。しかも、一世華僑が引退しつつある東南アジア経済界を担っている二世華人の寄付が多い点は注目に値する。

元来、南洋華僑は清朝末期から郷土社会に貢献してきた長い伝統をもち、企業収益の高い山東半島や上海へ投資した人びとも郷土開発への愛郷心を同時に發揮してきた。かかる愛郷華僑の伝統と港市の朝貢貿易を司った地方官僚の権威の伝統を考えるならば、合弁企業を担う華僑側が一種の政治的保険として子弟を華僑学校へ留学させたり、学校修復へ寄付したりする行為を理解することができる。しかし、華僑の心の深層にある宗教と民間信仰の中国性が根強く残存している事実も見逃してはなるまい。たとえば、莆田の禪宗寺院、台灣海峡に浮かぶ小島のマソ廟、福清の王氏宗祠堂などの再建現状調査例からみると、文化大革命当時、迷信の的とされ破壊された建物を最近数年間に修復した蔭の力は寄付兼ねを積んだ東南アジア経済界の二世華人なのである。また、米国、日本、台灣在留華人の浄財もその寄付名簿に記されている。

これらの新事実は合弁企業に進出する投資家を超えた在外華人の本音を物語っている。そこには、現住地文化へ変様していく華人の姿を追ってきた従来の諸説が見落としてきた、伝統中国文明の持続性をもつ華人の影が映っている。

フィリピン労働法とアジア的労使関係

神尾真知子

フィリピンの集団的労働法を歴史的に見ると、三つの時代に区分することができる。

1936年から1953年にかけての強制仲裁制度時代。産業関係裁判所が設けられ、それが強制的に労使紛争を処理した。また、厳しい組合登録制度も設けられ、未登録組合に対しては組合として活動する保障を与えたかった。この時代の労働立法は強権的性格が色濃く、植民地下アジア法体制の統制法理に支配されていたといえよう。

第二次世界大戦後、未登録組合の増大や強制仲裁の機能低下にみられるように強権的な労働立法は行き詰まった。そこで、ビジネスユニオニズムを基調とするアメリカ労使関係制度がフィリピンに移植された。

1953年から1974年にかけての団体交渉制度時代。産業関係裁判所の権限を限定し、労使紛争の処理は労使自治に委ね、政府の介入をひかえた。組合登録制度も廃止された。すなわち、労働力商品の取引という団体交渉を中心に据えており、基本的には市場法理によって支配されている労

模範であると評価する。この建前論は中国共産党の歴史上の人物再評価路線にそういうものであり、祖国近代化への華僑投資優待の政策と密接な関係がある。中国近代化に貢献した嚴復、愛国政治家康有為、香港解放の愛国先駆者林則除、台灣解放の愛国華僑鄭成功らの偉業をたたえる路線と軌を一にするものである。港澳同胞、台灣同胞、海外僑胞、外籍華人は陳嘉庚を模範とし愛国愛郷華僑の誠意を示すべきだという建前論に他ならない。

1980年代に入ると、中共党中央と国務院は対外開放政策を推進し、沿岸港市の14の経済技術開発区に導入外資の審査権限を一部委譲した。許認可業務を握る地方官僚の権威が高まる一方で、華僑合弁企業は合作の相手方にふさわしい信頼と忠誠を保証するために、子弟を祖国の華僑学校へ留学させたり、校友会組織等を通じて華僑学校へ設備と備品を寄付する傾向がめだった。アモイ、泉州、福州各地の華僑大学、高中学校における筆者の現状調査資料によれば、文化大革命当時に破壊された校舎の復旧や新式の科学教材の寄付を主として南洋華僑に依存している。帰国華僑連合会の建物、自動車、機器に至るまで同様である。しかも、一世華僑が引退しつつある東南アジア経済界を担っている二世華人の寄付が多い点は注目に値する。

元来、南洋華僑は清朝末期から郷土社会に貢献してきた長い伝統をもち、企業収益の高い山東半島や上海へ投資した人びとも郷土開発への愛郷心を同時に發揮してきた。かかる愛郷華僑の伝統と港市の朝貢貿易を司った地方官僚の権威の伝統を考えるならば、合弁企業を担う華僑側が一種の政治的保険として子弟を華僑学校へ留学させたり、学校修復へ寄付したりする行為を理解することができる。しかし、華僑の心の深層にある宗教と民間信仰の中国性が根強く残存している事実も見逃してはなるまい。たとえば、莆田の禪宗寺院、台灣海峡に浮かぶ小島のマソ廟、福清の王氏宗祠堂などの再建現状調査例からみると、文化大革命当時、迷信の的とされ破壊された建物を最近数年間に修復した蔭の力は寄付兼ねを積んだ東南アジア経済界の二世華人なのである。また、米国、日本、台灣在留華人の浄財もその寄付名簿に記されている。

これらの新事実は合弁企業に進出する投資家を超えた在外華人の本音を物語っている。そこには、現住地文化へ変様していく華人の姿を追ってきた従来の諸説が見落としてきた、伝統中国文明の持続性をもつ華人の影が映っている。

フィリピン労働法とアジア的労使関係

神尾真知子

フィリピンの集団的労働法を歴史的に見ると、三つの時代に区分することができる。

1936年から1953年にかけての強制仲裁制度時代。産業関係裁判所が設けられ、それが強制的に労使紛争を処理した。また、厳しい組合登録制度も設けられ、未登録組合に対しては組合として活動する保障を与えたかった。この時代の労働立法は強権的性格が色濃く、植民地下アジア法体制の統制法理に支配されていたといえよう。

第二次世界大戦後、未登録組合の増大や強制仲裁の機能低下にみられるように強権的な労働立法は行き詰まった。そこで、ビジネスユニオニズムを基調とするアメリカ労使関係制度がフィリピンに移植された。

1953年から1974年にかけての団体交渉制度時代。産業関係裁判所の権限を限定し、労使紛争の処理は労使自治に委ね、政府の介入をひかえた。組合登録制度も廃止された。すなわち、労働力商品の取引という団体交渉を中心に据えており、基本的には市場法理によって支配されている労

労働立法であった。

しかし、自由な団体交渉制度はフィリピンに根づくことは出来なかった。そこで、過去の失敗に学びつつ、経済発展を志向して新たな労働立法がなされた。

1974年以降の任意仲裁・強制仲裁の枠内での団体交渉制度時代。団体交渉を基本に据えているが、「任意仲裁・強制仲裁の枠内での」という形で労使紛争への政府の介入を認めた。労使自治に委ねた枠づけのない団体交渉では使用者と対等の立場に立つことが出来ない労働組合に対して、仲裁を通して政府が介入し労使の力のバランスをとり、政労使の三者主義によって紛争を解決しようとする制度である。

労使関係を経済発展に方向づけるためには経済発展計画の立案者である政府が、労使の対立する利益を調整する必要があり、三者主義の採用は、発展法を支える統制法理が端的に表れているといえよう。

また、フィリピンの任意仲裁に至る苦情処理手続きでは、上の段階に行くにつれ、労使間の話し合いの要素が強くなっている、最終的に第三者が労使の調和をはかり合意に導く。労使紛争の処理において、衝突よりも協調を求める共同体法理が浸透していることを示している。

現在のフィリピン労働法は、団体交渉にみられる市場法理、三者主義にみられる統制法理、そして協調的労使関係にみられる共同体法理が交錯しながら、その法体制を形成している。これが、アジア的労使関係として概念化されるものである。

天の川を Bima-Sekti と呼ぶジャワ人の神話的論理

中島成久

一、天の川の「北の石炭袋」と呼ばれる蛇遺座、射手座。蠍座付近の巨大な暗黒部をジャワ人は、ワヤンの英雄、剛勇のビモの姿とみなしている。ジャワ語でそれを 'Bima-Sekti' (ビモ・セクティ) と呼んでいる。更に、天の川全体をも 'Bima-Sekti' と呼ぶが、その時は「ビマ・セクティ」と発音され、インドネシアの他の地域と共通な呼称法となる。報告者の問題は、何故天の川の暗黒部がジャワで「ビモ・セクティ」と呼ばれるのか、また、数多いワヤンの英雄のうちで何故ビモの姿が投影されているとみなされているのか、その背景となる神話的論理は何なのかを明らかにすることである。

セクティとはサンスクリットのシャクティのことで、一般に「呪力・超能力」のことである。ワヤンのキャラクターの中でビモは、このセクティを最も体現した人物である。ビモの一生は、誕生、結婚、子供の出生といったあらゆる段階でセクティに満ちている。

ビモに関するラコン（演目）のうち最も有名なものが「デウォルチ」である。デウォルチは、クジャワンと呼ばれるジャワの神秘主義の理想を感動的なまでに追求する。ワヤンの正義を代表するパンダワ軍にあってビモは荒ぶる神の側面を持つが、そのビモの過剰なまでの荒々しさは内面の自己（=神）を求める真摯な姿でおぎなわれ、ビモの魅力を豊かなものとする。しかも、デウォルチを構成する世界を整理すると、ジャワの宇宙論と深くつながっていることに気が付く。旧師の嘘に由来するとはいえばビモは、月面山の麓におもむき、飛ぶようにして走り、自然界の声援をうけ、海中でデウォルチ（自分自身=神）に出会い、宇宙の運行をも統べる秘義を身につける。だがビモは死者の世界に足をふみこんでいた。

二、ジャワ人の想像力の中でビモは、あらゆる世界を通過しうる能力を持つ。それは、自然界

労働立法であった。

しかし、自由な団体交渉制度はフィリピンに根づくことは出来なかった。そこで、過去の失敗に学びつつ、経済発展を志向して新たな労働立法がなされた。

1974年以降の任意仲裁・強制仲裁の枠内での団体交渉制度時代。団体交渉を基本に据えているが、「任意仲裁・強制仲裁の枠内での」という形で労使紛争への政府の介入を認めた。労使自治に委ねた枠づけのない団体交渉では使用者と対等の立場に立つことが出来ない労働組合に対して、仲裁を通して政府が介入し労使の力のバランスをとり、政労使の三者主義によって紛争を解決しようとする制度である。

労使関係を経済発展に方向づけるためには経済発展計画の立案者である政府が、労使の対立する利益を調整する必要があり、三者主義の採用は、発展法を支える統制法理が端的に表れているといえよう。

また、フィリピンの任意仲裁に至る苦情処理手続きでは、上の段階に行くにつれ、労使間の話し合いの要素が強くなっている、最終的に第三者が労使の調和をはかり合意に導く。労使紛争の処理において、衝突よりも協調を求める共同体法理が浸透していることを示している。

現在のフィリピン労働法は、団体交渉にみられる市場法理、三者主義にみられる統制法理、そして協調的労使関係にみられる共同体法理が交錯しながら、その法体制を形成している。これが、アジア的労使関係として概念化されるものである。

天の川を Bima-Sekti と呼ぶジャワ人の神話的論理

中島成久

一、天の川の「北の石炭袋」と呼ばれる蛇遺座、射手座。蠍座付近の巨大な暗黒部をジャワ人は、ワヤンの英雄、剛勇のビモの姿とみなしている。ジャワ語でそれを 'Bima-Sekti' (ビモ・セクティ) と呼んでいる。更に、天の川全体をも 'Bima-Sekti' と呼ぶが、その時は「ビマ・セクティ」と発音され、インドネシアの他の地域と共通な呼称法となる。報告者の問題は、何故天の川の暗黒部がジャワで「ビモ・セクティ」と呼ばれるのか、また、数多いワヤンの英雄のうちで何故ビモの姿が投影されているとみなされているのか、その背景となる神話的論理は何なのかを明らかにすることである。

セクティとはサンスクリットのシャクティのことで、一般に「呪力・超能力」のことである。ワヤンのキャラクターの中でビモは、このセクティを最も体現した人物である。ビモの一生は、誕生、結婚、子供の出生といったあらゆる段階でセクティに満ちている。

ビモに関するラコン（演目）のうち最も有名なものが「デウォルチ」である。デウォルチは、クジャワンと呼ばれるジャワの神秘主義の理想を感動的なまでに追求する。ワヤンの正義を代表するパンダワ軍にあってビモは荒ぶる神の側面を持つが、そのビモの過剰なまでの荒々しさは内面の自己（=神）を求める真摯な姿でおぎなわれ、ビモの魅力を豊かなものとする。しかも、デウォルチを構成する世界を整理すると、ジャワの宇宙論と深くつながっていることに気が付く。旧師の嘘に由来するとはいえばビモは、月面山の麓におもむき、飛ぶようにして走り、自然界の声援をうけ、海中でデウォルチ（自分自身=神）に出会い、宇宙の運行をも統べる秘義を身につける。だがビモは死者の世界に足をふみこんでいた。

二、ジャワ人の想像力の中でビモは、あらゆる世界を通過しうる能力を持つ。それは、自然界

(動物・植物)と交流し、異郷(天上、地下、海=死の世界)を自由に往来するビモのイメージの総体である。

インドネシアにおいて、異郷との往来を可能にするものが虹と蛇である。天にかかる虹は、天上と地上との架け橋であるが、これはしばしば蛇と同一視される。蛇は地下界を統べるが、地下界そのものは天上界と地上界と並んで三分された世界の一つであるが、神／人／動物という分類と対応する。更に、意味論的には天上と地下、神と動物は互換性をもつ。このことは、ジャワの王権をめぐる諸神話〔ジョコ・タロップ、スルタンのプサカの上着(コタン・オントクスモ)の由来など〕によって確認することができる。

三、天の川の暗黒部をビモ・セクティと呼ぶ深層でジャワ人は、ビモ≈飛翔≈蛇≈虹≈天(の川)という神話学的変換をなしている、と報告者は主張したい。このようなジャワ特有の変換の論理を背景として、天の川の「北の石炭袋」はビモの姿の投影とされる。更に、天の川の暗黒部をビモ・セクティと呼び、天の川全体をビマ・セクティと弁別することにも意味がある。もし暗黒部が死の世界に通ずることがあっても、その時の死は、デウォルチに永遠の生をみいだしたビモにふさわしく、永遠の生をあらわすといえるだろう。それは、反転したネガがポジをあらわすように、不気味な暗黒部に積極的な意味づけを与え、ジャワ人のみならず人間にとて最も根源的な問いに答えるものである。

(なお本報告は、「天の川はビモのセクティ」『法政大学教養部紀要』第59号、社会科学編、pp.139-187として、1986年1月に公刊されている)。

ジャワ建国説話の一考察

生田 滋

ジャワの建国説話を記録した古い史料としては「新唐書」卷二二二闔婆伝と「新編事林廣記」卷八所収の「島夷雜誌」大闔婆國の條の記事がある。これらから明らかになることは、ジャワの建国説話の要素としては、1) 国王はある特定の土地に移動すること、2) 女性が国王となること、3) 天父地母の聖婚から生まれた原人が国王となること——があったものと考えられる。ただ1)はシュリヴィジャヤ系統の建国説話の要素である可能性が強い。2)はのちに「パララトン」に見えるケン・ドゥドゥスのように、自分と結婚した相手を国王とする能力を持つ女性という形に姿を変えると思われる。3)は同じく「パララトン」のケン・アンロクにその姿が見られる。なお、この場合、混沌とした世界に秩序を再建するといった行為を伴うが、これはエルランガ王の事蹟を記した「カルカッタ碑文」の記述にも明瞭に観取される。「ババット・タナ・ジャウイ」においてはこれらの要素が王統譜の形をとてまとめられており、そこにはこれまでに見た建国説話とは異なり、王統重視の觀念が読みとれる。

カンボジア・アンコール遺跡における図像抽出と神話的世界

石澤良昭

カンボジアのアンコール遺跡群は世界最大級の石造建造物遺跡として知られている。これら大伽藍建立の思想的背景は、すでに述べられているように神格化された王が神への帰依の証しとして建立し、神像・仏像を寄進したのであった。碑文史料にはこうした事實を裏付ける Upanisad,

(動物・植物)と交流し、異郷(天上、地下、海=死の世界)を自由に往来するビモのイメージの総体である。

インドネシアにおいて、異郷との往来を可能にするものが虹と蛇である。天にかかる虹は、天上と地上との架け橋であるが、これはしばしば蛇と同一視される。蛇は地下界を統べるが、地下界そのものは天上界と地上界と並んで三分された世界の一つであるが、神／人／動物という分類と対応する。更に、意味論的には天上と地下、神と動物は互換性をもつ。このことは、ジャワの王権をめぐる諸神話〔ジョコ・タロップ、スルタンのプサカの上着(コタン・オントクスモ)の由来など〕によって確認することができる。

三、天の川の暗黒部をビモ・セクティと呼ぶ深層でジャワ人は、ビモ≈飛翔≈蛇≈虹≈天(の川)という神話学的変換をなしている、と報告者は主張したい。このようなジャワ特有の変換の論理を背景として、天の川の「北の石炭袋」はビモの姿の投影とされる。更に、天の川の暗黒部をビモ・セクティと呼び、天の川全体をビマ・セクティと弁別することにも意味がある。もし暗黒部が死の世界に通ずることがあっても、その時の死は、デウォルチに永遠の生をみいだしたビモにふさわしく、永遠の生をあらわすといえるだろう。それは、反転したネガがポジをあらわすように、不気味な暗黒部に積極的な意味づけを与え、ジャワ人のみならず人間にとて最も根源的な問いに答えるものである。

(なお本報告は、「天の川はビモのセクティ」『法政大学教養部紀要』第59号、社会科学編、pp.139-187として、1986年1月に公刊されている)。

ジャワ建国説話の一考察

生田 滋

ジャワの建国説話を記録した古い史料としては「新唐書」卷二二二闔婆伝と「新編事林廣記」卷八所収の「島夷雜誌」大闔婆國の條の記事がある。これらから明らかになることは、ジャワの建国説話の要素としては、1) 国王はある特定の土地に移動すること、2) 女性が国王となること、3) 天父地母の聖婚から生まれた原人が国王となること——があったものと考えられる。ただ1)はシュリヴィジャヤ系統の建国説話の要素である可能性が強い。2)はのちに「パララトン」に見えるケン・ドゥドゥスのように、自分と結婚した相手を国王とする能力を持つ女性という形に姿を変えると思われる。3)は同じく「パララトン」のケン・アンロクにその姿が見られる。なお、この場合、混沌とした世界に秩序を再建するといった行為を伴うが、これはエルランガ王の事蹟を記した「カルカッタ碑文」の記述にも明瞭に観取される。「ババット・タナ・ジャウイ」においてはこれらの要素が王統譜の形をとてまとめられており、そこにはこれまでに見た建国説話とは異なり、王統重視の觀念が読みとれる。

カンボジア・アンコール遺跡における図像抽出と神話的世界

石澤良昭

カンボジアのアンコール遺跡群は世界最大級の石造建造物遺跡として知られている。これら大伽藍建立の思想的背景は、すでに述べられているように神格化された王が神への帰依の証しとして建立し、神像・仏像を寄進したのであった。碑文史料にはこうした事實を裏付ける Upanisad,

(動物・植物)と交流し、異郷(天上、地下、海=死の世界)を自由に往来するビモのイメージの総体である。

インドネシアにおいて、異郷との往来を可能にするものが虹と蛇である。天にかかる虹は、天上と地上との架け橋であるが、これはしばしば蛇と同一視される。蛇は地下界を統べるが、地下界そのものは天上界と地上界と並んで三分された世界の一つであるが、神／人／動物という分類と対応する。更に、意味論的には天上と地下、神と動物は互換性をもつ。このことは、ジャワの王権をめぐる諸神話〔ジョコ・タロップ、スルタンのプサカの上着(コタン・オントクスモ)の由来など〕によって確認することができる。

三、天の川の暗黒部をビモ・セクティと呼ぶ深層でジャワ人は、ビモ≈飛翔≈蛇≈虹≈天(の川)という神話学的変換をなしている、と報告者は主張したい。このようなジャワ特有の変換の論理を背景として、天の川の「北の石炭袋」はビモの姿の投影とされる。更に、天の川の暗黒部をビモ・セクティと呼び、天の川全体をビマ・セクティと弁別することにも意味がある。もし暗黒部が死の世界に通ずることがあっても、その時の死は、デウォルチに永遠の生をみいだしたビモにふさわしく、永遠の生をあらわすといえるだろう。それは、反転したネガがポジをあらわすように、不気味な暗黒部に積極的な意味づけを与え、ジャワ人のみならず人間にとて最も根源的な問いに答えるものである。

(なお本報告は、「天の川はビモのセクティ」『法政大学教養部紀要』第59号、社会科学編、pp.139-187として、1986年1月に公刊されている)。

ジャワ建国説話の一考察

生田 滋

ジャワの建国説話を記録した古い史料としては「新唐書」卷二二二闔婆伝と「新編事林廣記」卷八所収の「島夷雜誌」大闔婆國の條の記事がある。これらから明らかになることは、ジャワの建国説話の要素としては、1) 国王はある特定の土地に移動すること、2) 女性が国王となること、3) 天父地母の聖婚から生まれた原人が国王となること——があったものと考えられる。ただ1)はシュリヴィジャヤ系統の建国説話の要素である可能性が強い。2)はのちに「パララトン」に見えるケン・ドゥドゥスのように、自分と結婚した相手を国王とする能力を持つ女性という形に姿を変えると思われる。3)は同じく「パララトン」のケン・アンロクにその姿が見られる。なお、この場合、混沌とした世界に秩序を再建するといった行為を伴うが、これはエルランガ王の事蹟を記した「カルカッタ碑文」の記述にも明瞭に観取される。「ババット・タナ・ジャウイ」においてはこれらの要素が王統譜の形をとてまとめられており、そこにはこれまでに見た建国説話とは異なり、王統重視の觀念が読みとれる。

カンボジア・アンコール遺跡における図像抽出と神話的世界

石澤良昭

カンボジアのアンコール遺跡群は世界最大級の石造建造物遺跡として知られている。これら大伽藍建立の思想的背景は、すでに述べられているように神格化された王が神への帰依の証しとして建立し、神像・仏像を寄進したのであった。碑文史料にはこうした事實を裏付ける Upanisad,

Purana, Agama などから引用した各種のテキスト残簡が掲げられていて、宗教的展開を見つけることができる。同時にインド本土との頻繁な往来と持続的な展開がこうした寺院の建立と宗教的儀式の執行を側面から支えていたといえるだろう。当時祭政一致的傾向の強い王権が、こうしたインド的枠組みを造形的、立体的に組み立てていく途中で、カンボジア版ヒンドゥ教・仏教の寺院・浮彫り・彫像・装飾文様などが表現され、そこにはインドの模倣ではなく、カンボジア的再構成と取捨選択があり、受容と変容という流れに沿ってあの壯麗な遺跡が建立されたのであった。

カンボジア的再構成の中で、特に図像描出の点から考えるならば、Siva 神、Visnu 神・仏陀などがインドのそれと異なった表現形式を創出していたのである。Siva 神は彫像よりも linga で多く表わし、Visnu 神は一面多臂が好まれ、蓮を大地の代用とする描出形式がとられていた。Visnu 神の持物のほら貝が腰にもたせかけるような位置に描かれていた。やはりインドでは見られない図像傾向である。当時のカンボジアでは Visnu 神の avatara (権化) として krsna と Rama が篤信され、Rama-Laksmana-Sita という3体像が造像されていた。こうした熱烈な avatara 信仰が、Angkor Vat 寺院を建立させるエネルギーを生み出し、Visnu 神的世界が「王 - Visnu - Rama」という同一図像表現で描出され、Mahabharata や Ramayana などで壁面浮彫りを飾り、大塔堂 - 大階段 - 大回廊という立体構成により宇宙神話的世界を実現したのであった。

カンボジアでは当時諸派の混淆的傾向が強く、Siva 神碑文の中に Visnu 神への献辞が載っていたり、Prasat Kravan 寺院の Laksmi 像は持物に Visnu の円盤と Siva の三叉戟を持ち、961年の Pre Rup 碑文では Visnu を Siva の sakti と扱っている。前アンコール時代には、Siva と Visnu の両神を一つの彫像に造像したハリハラ像が篤信されていた。

諸派の混淆的傾向に加えて、カンボジア人の神話的世界が図像描出に反映している。例えば Prasat Kravan 寺院の Visnu 神はワニ（トカゲ）をお供に連れている。Naga Ananta が龍へ変身し、Agni 神の乗物にサイが描かれ、こうしたカンボジア的変容が数多く見られる。

美術史の展開は13様式に時代区分がなされているが、ヒンドゥ教・仏教の盛衰を反映した寺院建立と造像があった。造像の面では、宗教的色彩が強く、Phnom Da 様式（6世紀）の写実主義的傾向から宗教伝統墨守主義を経て、Banteay Srei 様式では新しい息吹の中に繊細で気品あふれる彫像が制作され、その後 Angkor Vat の没人格的装飾芸術が流行し、12世紀末の Bayon 様式が内面的精神性を重視し、四面仏塔の大伽藍を建造したのであった。

カンボジアの彫像はインドのヒンドゥ教諸神の恐怖・肉欲・不気味な祟り神的神性を払拭し、カンボジア的混淆と変容を行っていた。

政治権力の起源の神話的説明 — 東南アジア大陸部諸国及び日本の事例 —

山本達郎

神話研究の領域は甚だ広いが、これを政治権力の起源を説明する神話の研究と限定してみると、そこに特別な意味が生まれる。そもそも政治権力といふものは、これを支えるために、また出来るだけこれを絶対化するために、人民に受け入れられるような神話的説明を必要とする。それに架空の物語が用いられる場合もあり、歴史事実が使われる場合もある。権力の源泉は、天界・地界・水界のどこかにあって、神か動物か人間のどちらかに由来する。人間の集団から由来する一

Purana, Agama などから引用した各種のテキスト残簡が掲げられていて、宗教的展開を見つけることができる。同時にインド本土との頻繁な往来と持続的な展開がこうした寺院の建立と宗教的儀式の執行を側面から支えていたといえるだろう。当時祭政一致的傾向の強い王権が、こうしたインド的枠組みを造形的、立体的に組み立てていく途中で、カンボジア版ヒンドゥ教・仏教の寺院・浮彫り・彫像・装飾文様などが表現され、そこにはインドの模倣ではなく、カンボジア的再構成と取捨選択があり、受容と変容という流れに沿ってあの壯麗な遺跡が建立されたのであった。

カンボジア的再構成の中で、特に図像描出の点から考えるならば、Siva 神、Visnu 神・仏陀などがインドのそれと異なった表現形式を創出していたのである。Siva 神は彫像よりも linga で多く表わし、Visnu 神は一面多臂が好まれ、蓮を大地の代用とする描出形式がとられていた。Visnu 神の持物のほら貝が腰にもたせかけるような位置に描かれていた。やはりインドでは見られない図像傾向である。当時のカンボジアでは Visnu 神の avatara (権化) として krsna と Rama が篤信され、Rama-Laksmana-Sita という3体像が造像されていた。こうした熱烈な avatara 信仰が、Angkor Vat 寺院を建立させるエネルギーを生み出し、Visnu 神的世界が「王 - Visnu - Rama」という同一図像表現で描出され、Mahabharata や Ramayana などで壁面浮彫りを飾り、大塔堂 - 大階段 - 大回廊という立体構成により宇宙神話的世界を実現したのであった。

カンボジアでは当時諸派の混淆的傾向が強く、Siva 神碑文の中に Visnu 神への献辞が載っていたり、Prasat Kravan 寺院の Laksmi 像は持物に Visnu の円盤と Siva の三叉戟を持ち、961年の Pre Rup 碑文では Visnu を Siva の sakti と扱っている。前アンコール時代には、Siva と Visnu の両神を一つの彫像に造像したハリハラ像が篤信されていた。

諸派の混淆的傾向に加えて、カンボジア人の神話的世界が図像描出に反映している。例えば Prasat Kravan 寺院の Visnu 神はワニ（トカゲ）をお供に連れている。Naga Ananta が龍へ変身し、Agni 神の乗物にサイが描かれ、こうしたカンボジア的変容が数多く見られる。

美術史の展開は13様式に時代区分がなされているが、ヒンドゥ教・仏教の盛衰を反映した寺院建立と造像があった。造像の面では、宗教的色彩が強く、Phnom Da 様式（6世紀）の写実主義的傾向から宗教伝統墨守主義を経て、Banteay Srei 様式では新しい息吹の中に繊細で気品あふれる彫像が制作され、その後 Angkor Vat の没人格的装飾芸術が流行し、12世紀末の Bayon 様式が内面的精神性を重視し、四面仏塔の大伽藍を建造したのであった。

カンボジアの彫像はインドのヒンドゥ教諸神の恐怖・肉欲・不気味な祟り神的神性を払拭し、カンボジア的混淆と変容を行っていた。

政治権力の起源の神話的説明 — 東南アジア大陸部諸国及び日本の事例 —

山本達郎

神話研究の領域は甚だ広いが、これを政治権力の起源を説明する神話の研究と限定してみると、そこに特別な意味が生まれる。そもそも政治権力といふものは、これを支えるために、また出来るだけこれを絶対化するために、人民に受け入れられるような神話的説明を必要とする。それに架空の物語が用いられる場合もあり、歴史事実が使われる場合もある。権力の源泉は、天界・地界・水界のどこかにあって、神か動物か人間のどちらかに由来する。人間の集団から由来する一

形式と言うべき近代の選挙制度の場合を除外すると、血統を辿って権威が伝わるという考え方方が圧倒的に強い。

東南アジア大陸部の諸国には中国文化・インド文化・イスラム文化が影響していて、これらの国の建国説話には、それぞれに、外来文化のどれかが現れているが、他方において、どれにも共通する要素の存在が注目される。どの国でも、水界に棲んでいて大きな靈力を持つ龍またはnagaが共通に現れる。中国文化圏なら龍、インド文化圏ならnagaであるが、一括して取り扱うことが出来るであろう。越南には顕著に見られるし、扶南・カンボジヤ・チャムパ・ラオス・タイ・ビルマにも、南詔にも認められる。注意すべき第一の点は、龍-naga の現れる物語が、説話の形式として、どの国の場合も全く異なっていることである。話の枠組みとしての形が違っているのであるから、龍-naga の要素を含む或る形式の物語が、一つの国から他の国に伝えられたと認めるることは困難である。第二の点は、どの国の場合にも外来の中国文化・インド文化或いはイスラム文化が物語の初めに、権威を説明すべき物語の要素として現れており、それが多くの場合に土着の要素としての形をとる龍-naga と、対立或いは並立する構成となっている。これらの点から見ると、龍-naga を権力の本源とする考え方は、中国文化・インド文化の伝播よりも古く、土着の色彩が強いと言ふべきであろう。

日本神話では、権力の起源を天上に求める解釈が多く行われているが、神武天皇に至るまでの系譜に、海神から来る血統がそれ以上に強く現れることに注目すべきであろう。龍-naga を特に重視する考えは、水が生活を大きく左右する社会が背景にあったとみるべきで、農業、特に水田耕作、に注目しておきたい。この問題は龍-naga と関係のある伝承、競渡・拔河・即位式・鯨・虹などと併せて考えるべきである。

『東南アジア—歴史と文化—』

No.15, 1986.6.

(論文)

- ヴェトナムをフェ駐在(1876-79) 仏公使P. フィストラルはどう見ていたか・・・坪井 善明
第二次大戦期の日本の対インドシナ経済政策・・・・・・・・・・・・白石 昌也
植民地統治下のフィリピンにおけるマニラ麻産業・・・・・・・・・・・・早瀬 晋三

(研究ノート)

- タイ史概説と歴史記述・・・・・・・・・・・・・・・・市川 健二郎
勃興期の麓川とマオ・シャンについて・・・・・・・・喜田 幹生

(特別寄稿)

めんぱ

- チベット・ツォナ県門巴族概説・・・・・・・・・・・・索文清著、八巻佳子訳
南中国古代文明の再評価—中国南方先秦史研究の現状論評—・・・孫華著、西江清高訳

(書評・紹介)

蔡史君編修、莊惠泉原出版人、許雲樵原編著

「一九三七～一九四五新馬華人抗日史料」・・・・・・・・明石 陽至

Hisako Nakamura, <u>Divorce in Java</u>	坪内 良博
インドネシア共和国教育文化省編、森弘之・鈴木恒之訳	
「世界の教科書=歴史、インドネシア」	田中 則雄
ビルマ研究グループ編『ビルマ関係邦語文献目録』	生田 滋

[モンスーン・学界消息]

オーストラリア国立大学における東南アジア研究の近況	弘末 雅士
中国における東南アジア史研究の近況—雲南からの通信—	栗原 悟
第二回ケンブリッジ=デリー=ライデン=ジョクジャカルタ会議	小林 寧子
バンدونにおけるスンダ史研究の現状—Lembaga Sundanologiの発足—	大橋 厚子
インドネシアにおける遺跡保存事業の視察報告	千原大五郎
シュリヴィジャヤ考古研究集会に参加して	伊東 照司
インドネシアの土器と墓—ジャワ・スマトラ短期調査行—	坂井 隆
幻のハズー・コレクション	永積 昭
ミンダナオの大学・研究状況	早瀬 晋三
ビルマ文学研究の動向	堀田 桂子
ビルマ留学事情	根本 敬
タイ国歴史学会	赤木 攻
ベトナム社会科学委員会の紹介	パン・フィ・トン著、桜井由躬雄訳
苗族の犬供養と犬崇拜—調査ノートより—	白鳥 芳郎
全国畲族学術討論会に参加して	長繩 肇子
東南アジア・イスラーム研究会設立のお知らせ	中村 光男
国際シンポジウム「アジアの文化遺産の再発見」	石澤 良昭
尚美学園のタイ国楽器	種瀬 陽子

東南アジア関係文献目録(1984年1月~12月) 加治 明、伊東 照司

定価 3,600円 予約先: 平凡社 〒102 東京都千代田区三番町5 TEL 03-265-0451
振替 東京 8-29639 (春季大会会場でも販売いたします。)

『東南アジア—歴史と文化—』原稿募集
No.16 (1987年6月刊行予定)

原稿締め切り: 1986年11月末

執筆要領

学術雑誌としての精密さを高めるために、次の点について御協力をお願ひいたします。

1. 投稿論文は編集部の責任によって選定の上、編集します。採用原稿は原則として返却しません。また稿料の支払い、掲載料の徴収はしません。論文、研究ノートの抜刷りは30部に限ります。
2. 用語は日本語(なるべく当用漢字、新かなづかい)で横書きして下さい。欧文、特殊文字

- (タイ文字等)のある原稿、写真、付図の掲載については投稿前に編集委員会へ御相談下さい。
3. 論文、研究ノート等の原稿は 200字詰横書き原稿用紙 100枚以内、書評・紹介は50枚、学界消息は10枚以内にまとめて下さい。
 4. 内容に関する読者の質問のために、本文末尾に郵便連絡の宛先を書いて下さい。
 5. 論文には欧文要旨(500~1,000語)をつけて下さい。その他の原稿にも英文タイトルをつけて下さい。特に学界消息の英文タイトルは簡潔にして、一行以内に納まるようにして下さい。編集いいなかいの責任において、欧文の訂正をすることがあります、あらかじめ御了承下さい。
 6. 註は本文末尾にまとめて下さい。

投稿についての問い合わせ先:

〒102 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学アジア文化研究所 気付 「東南アジア一歴史と文化」編集委員会 (TEL 03-238-3697)

東南アジア史学会 昭和60年度会計決算報告

(昭和60年1月1日~12月31日)

会計委員 加治 明

I 収入の部	円	II 支出の部	円
会員会費	438,500	会報No.42 第33回大会プロ	
郵便貯金利子	23,433	グラム印刷費及び発送費	121,950
名簿売上金	13,120	第33回大会費	55,000
<u>前年度繰越金 1,168,944</u>		会長選挙事務費	23,960
	1,643,997	会員名簿印刷費	321,300
		第34回大会予報費	
		(葉書代・同印刷代)	32,950
		会報No.43, 第34回大会	
		プログラム等印刷費	88,400
		第34回大会費	69,364
		第34回大会講演者謝礼	20,000
		通信費	106,280
		事務費	34,150
		計	873,354
		III 差引残高 (次年度繰越金)	770,643

1,643,997

1,643,997

会計簿を点検した結果、誤りのないことを確認しました。

昭和60年12月31日 会計監査委員 和田久徳 印

昭和61年4月発行

発行者 東南アジア史学会（会長 石井米雄）
住所 606 京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究センター
電話 075-751-2111 内線 7348
郵便振替 京都 3-30980 東南アジア史学会
